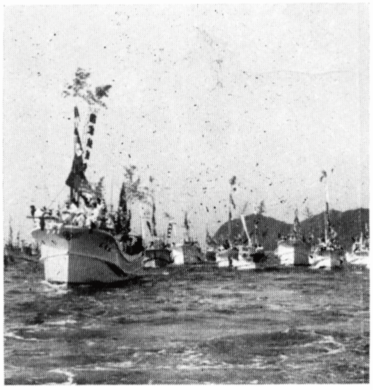
宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311代
定価 一年送料共 1000円

「柿も生姜も放生会」近まる秋季大祭



宗像地方に秋の到来をつげる、当大社最大の祭典、秋季大祭がいよいよ近づいた。

当大社の秋季大祭は、「田島放生会」とも称され、今から約七百年前の鎌倉初期の時代に、時の大宮司宗像氏経が始めたと伝えられている。

このお祭りの由来は、「宗像大菩薩御縁起」に、「吾れ昔、五千九百余の従神を率いて、二千余万里の風浪を凌いで御長手（旗竿）の凶賊を害した。是れ則ち国のため民のためといへ、若干の殺罪を犯すところである。よって早く放生供養すべし。」との御託宣により、放生会が始まったと伝えられており、神功皇后の三韓征伐の故事によるものとされている。

大祭は十月一日より三日まで、国家・皇室の平穏と弥栄、五穀の豊穣を感謝して、神郡宗像の郡民あげて盛大に斎行される。特に十月一日午前九時半に大島港を出航、神湊港まで沖・中両宮の御神璽を奉戴した御座船を先頭に、約五百隻の漁船が供奉して紺碧の海面に幾条もの白い航跡を引きながら、玄界灘洋上に繰り広げられる海上神幸は、秋季大祭の幕開けを飾るにふさわしい壮観なもので、古代宗像海人族の往時の姿を髣髴とさせる。

又、沖・中両宮の御神璽をお迎えした辺津宮では、主基地方風俗舞、当社伝承の翁舞、浦安舞、流鏑馬など各種の神事が連日奉納されるほか、境内には三百軒余りの露店も処狭しと軒を並べる。

地元の人々は、昔より「柿も生姜も放生会」と言っており、生活の一つの節目として待ちに待ったお祭りだけに、三日間境内は終日多数の参拝者で大いに賑う。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二―三一（〒812）
電話福岡（0九二）六五一―九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600）
三四一―三三四一㈹～四番
電話京都（0七五）三四三―三三四一番

秋季大祭日程

九月三十日（水）
午後五時　総社地主祭
午後六時　宵宮祭

十月一日（木）
午前八時三十分　中津宮出御祭
午前九時　辺津宮出御祭
午前九時三十分　大島港出発（海上神幸）
午前十時三十分　神湊港到着
午前十時五十分　頓宮祭（雨天中止）
午前十一時二十分　頓宮御発輦（陸上神幸）
午前十一時四十分　辺津宮入御祭（風俗舞）

十月二日（金）
午前八時　流鏑馬神事
午前十一時　例大祭（氏子奉幣・翁舞）
　奉納相撲
午後二時　末社祭

十月三日（土）
午前十一時　総社祭（浦安舞）
午前十一時四十分　高宮祭
　宗像護国神社秋季大祭
　第二・第三宮祭
午後二時　献茶祭（南坊流＝滝口宗孝社中）

※尚、大祭期間中三日間臨時バスが運行されます。

臨教審答申と日本人の自覚

臨時教育審議会の岡本道雄会長は八月七日、第四次答申（最終答申）を中曽根総理に提出し、これでその役割を完了した。委員・専門委員諸氏の三年間にわたる熱心な審議に敬意を表し、労を多とするものである。

答申は全四冊、総ページ数四百五十二に及ぶ。これを一つの著作物と見た場合は組立てが複雑で、通読するのにいささか困難を感ずるが、審議の過程にしたがって積重ねられてきた関係上、やむをえないことであろう。望むらくは、全編を一日解きほぐして重複を削り、所見を整理し、流れの滑らかな論文として再構成してほしい。そういう形の出版物として公刊されたならば、一般国民にも広く読まれ、影響も現れてくるであろう。これは必要なことである。

○

さて、答申はいうまでもなく総理の諮問に正対してこれに的確に応ずるものでなければならない。その諮問事項は「我が国における社会の変化及び文化の発展に対応する教育の実現」を図るための基本的方策であった。これには理由書きが付属しており、情報化社会の進展、国際化の趨勢などを見ながら、二十一世紀に向けて我が国が創造的で活気ある社会を築いて行くためには教育はどうあればよいか、「教育基本法の精神」にのっとって答申を出してほしいという趣旨が述べてある。

教育基本法を不磨の教条とすることが第一の枠であり、二十一世紀という未来からの挑戦を受けて立つ教育であるためには、昭和四十六年の中教審答申のように学校教育に限定をせず、広い意味での教育、つまり生涯教育が第二の枠であったから、これを受けた答申は特に情報化社会の進展や国際化に重点を置き、学校教育は生涯教育の一部分であるにすぎないという立場をとって大構想をくりひろげているのである。すなわち、答申は教育的観点から日本の社会そのものを論評し建策をしているのであって、識者から抽象論が多いと指摘される理由は此処に在る。

山積する現実の諸問題に体当りすることはたやすくない。したがって、委員各自の提案が相互に矛盾したり衝突を起したりすれば、これを削平したり曲線にしたりして成案に達するのがこの種の作業のやむを得ない経過である。おそらく、委員の中には成案に不満の人もあるであろう。部外者にとってはなおさらである。

○

筆者は諮問理由にある第一の枠、すなわち教育基本法の精神にのっとるということは、同法前文の「普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」という教条が、いかに強く答申の掲げる「世界の中の日本人」に影響を与えているかを取上げざるを得ないのである。

「普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化」とは、たとえば世界中に普及している西洋建築を写し取りながらも、その中に日本風のデザインが見られるというような意味であるのか、もしそうであるとすれば、それは主として造形文化の側面において認められるとしても、内面的な文化にまで及ぼし得る論理ではない。

日本人が日本人として自らを磨き上げてゆくとき、そこに光を放つ内面的価値こそ普遍性をもつのであって、答申が求めている世界の人から信頼される日本人とはこのような個性と教養を身につけている人士を指すはずである。答申が「よき国際人は良き日本人」と謳い上げているのは正に教基法前文の錯倒論理をそのまま受けたもので、臨教審の負うた悲劇的運命というべきであろう。

○

筆者は第三次答申が出た時、本紙の四月二十日号にこれを批評し、海外で他国の旗や国歌に対して敬意を表すマナーを身につけよと説くのはよいが、自国日本の旗や国歌のことに一言も触れないのは適切でない、と指摘した。塩川文相もこのことについて臨教審に要望したようで、最終答申には第一章3「教育の基本的在り方」の末尾にようやく書き添えられたのであった。しかしその扱いはどう見ても「つけたり」で、「国を愛する心」、「広い国際的、人類的視野」を説いたあと、「なお、これに関連して、国旗・国歌のもつ意味を理解し尊重する心情と態度を養うことが重要」であると述べている。「なお、これに関連して」では外国の旗より軽く扱われているようで不満感が残る。

とはいうものの、臨教審の立場にも理解と同情を持たなければならない。第四次答申の提出を報じた新聞は解説に「極めて政治色の濃い審議内容」であると批判し、その「象徴的な例が『日の丸・君が代』」問題であると指摘して、ゆさぶりをかけている(中日)。マスコミがこの調子では臨教審たるもの、風当りを気にしながらの難航であったことがよく分るのである。要するに答申は、最初の意気込みとは裏腹に、その哲学を自問しないまま戦後改革の昭和六十二年版を発行したということになる。

（神社新報より）

余滴

「地震、雷、火事、親爺」、むかしから、恐いものの代表とされてきたが、この中で親爺殿は、家族制度の崩壊と、核家族化によりすっかり権威を失墜、脱落して了った。が、残りの御三家は、なお厳然たる威圧感を保持している。

特にこの夏は改めて雷の恐さを思い知らされた。海岸では、サーファー六人が亡くなり、動物園では雷に興奮した象が飼育係を圧死させた。またテニス試合中のカーボン製のラケットに落ちて選手が重体、等々。

「いかづち」は「厳つ霊（ち）」で古くから強烈な威力のあるものと恐れられてきた。しかし、その直接的猛威もさることながら、副次的な落雷による停電の被害はより脅威的であった。照明、テレビ、クーラー、冷蔵庫、炊飯器……、日常生活の機能は全てストップ。それが長時間に及ぶ時、事態は深刻である。落雷に限らず、東京では猛暑によるクーラーの一斉使用で、電力の供給限度をオーバーし広範囲にわたる停電で大混乱をきたした。

日頃は、日光や空気と同じく電気の存在を意識することもないが、凡ゆる分野で電化の進んだ現代社会に於てその供給を絶たれることとは正に息の根を止められるに等しい。驚異的科学技術の進歩により、我々は高度で快適な文化生活を楽しむことが出来るが、この繁栄も砂上の楼閣のように脆いものであることを知り愕然とする。文明人としての優越感も瞬時の災害により木から落ちた猿同様の無力感に変る。雷の一撃は、自然を征服したと錯覚する人間の驕慢に対する神の警告である。

第三一四回

宗像大社歌会詠草

中村吾郎選

毎月末日〆切

大島　中村さつき
何処にも天草を干すわが島は梅雨の晴れ間の光を浴ぶる

（評）島の何処にも干されてある天草が、日の光を浴びて匂う。それは一所の無理もない表現にもとづく。

東郷　藤崎　辰子
毀さるる家の窓より抛られて障子が梅雨の雨に濡れゐる

（評）歌は心という。心は純粋でなくてはならない。障子には人の生活のにおいが滲んでいる。

八幡東　田辺　静馬
島よ還れ悲願の旗の翻えるノサップ岬の低き家並み

（評）魅かれる歌ではあるがテレビの域を脱していないように見えるのは「悲願」という堅い語の故か。

田熊　鷲頭かつ代
妬きまで羨しかりけり吾よりも年かさにして眼も耳もよき

大島　屋形とみえ
朝市に集ふ主婦らのおほかたは箱をかこみて魚分けあふ

池田　小田しめの
ささやかな老のよろこび結ぶこととなしとも思ひ紐選びをり

宮田　片山　朔子
日曜日を心足らいていそしめり綿絹の浴衣をスカートに解く

小倉北　松木　政子
うら庭に鳥が運びて育ちたる万両の木に實のつくを待つ

原町　八波　五月
三反まちの畦塗り終えし農婦一人溝を濁して泥鰍すすぐ

池田　小田　イセ
低山の緑の梢に留りたる花かとまがふ鷺の一群

大島　目原　節子
宿に見ゆ白夜の阿寒湖音絶えて釣舟一つ沖に浮べる

八幡東　永田久美子
花展覧楚々と活けし野の花に魅せられし吾は朝の野に出づ

八幡東　輪竹　キト
痛みし歯抜きて淋しく老を知る残る前歯を鏡にうつし

鐘崎　安永　久子
リューマチにゆがみし姉の手の温みよみがえり来ぬ三回忌今日

八幡西　川崎　ウラ
炎天に花の合間の草抜けば酢漿草の種一せいに飛ぶ

田久　立花　勇雄
はるけくも来りし思ひ宗谷岬最北端の碑の前に佇つ

福間　清原　絹代
地下街の角を曲れば洋菓子の甘き匂ひす歩きのゆるむ

田熊　力丸　一郎
初盆に友の遺影をながめゐて七十年の来しかた想ふ

八幡西　山田アヤ子
夕立のあがりし空の青く澄み木槿の花のあわあわと咲く

香椎　桜井　ツ子
碍子多き電柱の天辺に啼く鴉朝より暑き曇りの下に

八幡西　山田　耕夕
久々にわが家の敷居跨ぎたり救急車来し日を思ひつつ

自由ケ丘　後藤　君代
遠きまで青き信号見ゆるときわがゆく先に幸待つごとし

武丸　立石ろせ乃
丁寧に言葉をかけてくれし人思ひ出だせず吾は戸惑ふ

福岡中央　山下しづえ
ようやくに微風渡りきて汗引きぬ残暑きびしき午後四時半に

曲　天野トモエ
裏岸の草を刈り又剪定に日がな一日励むわれなり

沖津宮
御神璽迎え海上神幸

台風十三号の余波がまだ残る、九月十九日、当大社沖津宮より御神璽をお迎えし、中津宮に奉安する海上神幸が斎行された。

この神事は、当大社秋季大祭の初頭を飾る海洋神事（みあれ祭）に先立ち、九月中旬の海上穏やかなる日を選び、沖ノ島に渡島し、沖津宮の御神璽を大島の中津宮までお迎えするものである。

前日の十八日午後より、養父宮司以下奉仕神職、報道関係者等は大島に渡島、四時から斎行された「沖津宮御神璽お迎へ沖ノ島渡島安全祈願祭」に参列した。同祭典には海洋神事奉賛会々員、御座船第七宮地丸船長宮本登志丸氏、沖・中両宮奉賛会々員等も一緒に参列された。

十九日、中津宮社務所に参籠した宮司以下一行は、午前六時起床、朝食の後祭具の再点検を行い、六時四十分大島港に集合、御座船に乗船した。

今回の祭典には、RKB毎日放送より、九月二十九日午後十時より放映される「玄界灘」の取材、撮影班六名も同行、奉仕神職、参列者を含め総員二十二名の大人員となり、大型漁船第七宮地丸の船上も狭く感じられた。

舳先に波切り御幣と、日の丸、大漁旗を、中央マストに「国家鎮護宗像大社」の大幟を掲げ、中央と艫の両舷側に紅白の吹き流しをなびかせながら、第七宮地丸は、エンジンの音も高らかに紺碧の玄界灘へと午前七時定刻通り出航した。

台風の余波であろうか、海上はうねりが高い。又この新船第七宮地丸は、二十ノット以上の早さである。舳先でくだけた波しぶきが艫まで飛んで来る、空は雲一つない秋晴れの中に真白い波しぶきが美しい弧を描く、「あっ虹だ!!」誰かがさけんだ、朝日輝く中に飛んだ波しぶきの中に美しい七色の橋が左舷に浮んでは消える。

青い空、紺碧の海、その中間に飛ぶ白波、そして輝く七色の橋、美しい！ほんとうに美しい状景である。

出港して約三十分、突然上空に爆音が響き、RKB取材のヘリコプターが現れた。高度を下げたヘリには、我々にカメラを向けているカメラマンの顔がはっきりわかる。思わず人々はヘリに向って手を振った。船上を二度三度と旋回したヘリコプターは、秋空の中に姿を消した。右に左にと大きくゆれる船、波しぶきでカッパを必要とする船上で苦闘する事約一時間半、エンジンの音が低くなった。立ち上がると目前に沖ノ島があり、左右に巨大なテトラポットが積み上げられている、第七宮地丸は午前九時、沖ノ島港に入港した。参列者全員で海中禊を行い本殿に参進する。左右の巨大な樹木が先の台風十二号の直撃を受け、枝は折れ、葉は茶色となり、無残な姿となっている。しかし本殿附近は台風の被害もなく、千古のしじまを守っていた。

午前十時、養父宮司の祝詞が流れる中、出御祭は斎行され、沖津宮の御神璽は奉持神職の手により無事、第七宮地丸船室に奉安された。船上での直会も楽しく終り、午後一時沖ノ島港を出航し一路大島に向った。午後二時半、大島村長以下氏子の人々の出迎えを受けた御神璽は、午後三時中津宮に奉安され、無事神幸神事を終了した。

あとは、十月一日の沖・中両宮御神璽が二隻の御座船に奉安され約七キロの大海上パレードをくり広げる「秋季大祭海上神幸」を待つばかりである。

今年の御座船は、

中津宮御座船
第七宮地丸（17トン）
船長　宮本登志丸　（大島）
沖津宮御座船
第八幸漁丸（19トン）
船長　権田　芳之　（鐘崎）

の両船が御奉仕される。

宗像大社氏子会
総代総会開催

秋季大祭をいよいよ間近に控えた、九月十四日午前十一時より、当大社氏子会総代総会が清明殿に於て開催された。

当日は河野幸人会長を始め、宗像郡市内の各校区より評議員、総代九十五名が参集、神社側より養父宮司以下神職八名が出席して開催された。

午前十時半頃より各地区の評議員、総代が三三五五参集、会議に先立ち本殿に於て正式参拝を執り行い、出席者全員お祓いを受けた後、占部副会長の玉串拝礼に合せて拝礼を行った。

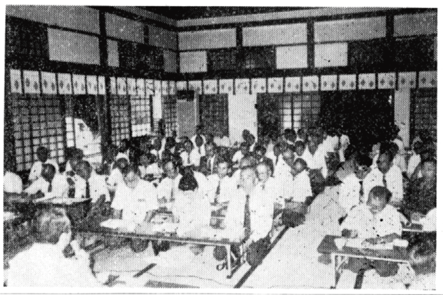
会議は定刻通り開催され、藤井副会長の開会の辞に始まり、国歌斉唱、神宮並びに皇居遥拝、敬神生活の綱領唱和と式次第に則り進行、河野氏子会々長の挨拶、当大社養父宮司の挨拶が行われた後、議題へ入った。

本総会は、当大社秋季大祭斎行に当り、評議員、総代各位の御奉仕並びに御協力をお願いすることが主目的であり、秋季大祭祭典斎行と神賑行事の日程、大祭期間中の役員分担の発表、説明がなされた。続いて氏子を代表して宗像大神に奉幣詞を奏上する、氏子奉幣使は宗像市より選出していただくこと、又昭和六十二年度の氏子納金未納の地区は、秋季大祭期間中或いはしかるべき折に納入をお願いするなど、議事が進められた。

尚氏子奉幣使には、南郷校区昼掛の東房進氏が宗像市の総代による相談の結果選出され、奉仕者に決定した。

その他の議事に於て、養父宮司の挨拶にて発表された、九月二十一日に行われる、福間町東福間の氏子会組織結成発会式に於ける要望や、事務局からの依頼などがなされて、予定の議題も全て滞りなく無事審議、了承された。

議事終了後、田熊の花田総代の音頭により、宗像大社の弥栄を祈念して万才三唱が行われ、占部副会長の閉会の辞をもって会議は遅滞なく終了した。



会議終了後、斎館にて会食が行われ、秋季大祭と言うよりは、「田島放生会」と言った方がなじみのある総代さん達の間で、思い出話に花が咲き、和やかな雰囲気の中に、無事氏子総代会が終了した。

交通安全
キャンペーン実施
――冷たいおしぼりどうぞ――

交通事故の撲滅、それは車社会の現代に於て最も大きな課題であり、悲願でもある。この悲願達成に向けて、ドライバーに安全運転を呼び掛けるべく、去る七月二十二日、八月四日には宗像警察署、宗像交通安全協会が、又お盆の帰省ラッシュが始まった八月十一日にはフクニチ新聞社が、各々交通安全キャンペーンを実施、当大社もこれに協力して、交通安全の啓蒙に努めた。

七月二十二日は宗像市の白水峠で、八月四日は玄海町江口で行われ、交通安全協会職員、市町職員等が乳酸飲料やパンフレットを、巫女がお守りとステッカーを手渡し、「安全運転でお願いします！」とドライバーに訴えた。

又八月十一日には、九州自動車道古賀サービスエリアで、県警高速道路パトロール隊、日本自動車連盟九州支部等も当大社と共に後援して実施された。県外ナンバーの目立つ中、サービスエリア出口で、交通安全キャンペーンガールが冷たいおしぼりとキャンディーを、巫女もお守り、ステッカーを手渡し、「お疲れさまです、お気をつけて」と声をかけると、最初は何事かと訝しげな表情だったドライバーも、ほっとした笑顔で「ありがとう、ご苦労さま」と答え、長距離運転の疲れもいちどに吹きとんだ様子であった。

「交通事故のない社会」実現のため、ドライバーの皆さん、呉々も安全運転をお願いします。

三十六歌仙扁額（五）
天正年間奉納（一）

楽　松　子

宗像大社が所蔵している五組の「三十六歌仙扁額」の全ては、むかしは順次拝殿に掲げられていたのが、後には社宝として、宝物庫に収め伝えられてきたようである。今、これらの扁額は神宝館三階で、一回に約二十点の割合で展示替えを行ないつつ、巡回公開をしている。

所蔵する扁額は量の上でも、他所に例をみない程の豊富さである。それぞれの扁額が描かれた製作年代も、〝なんねんもの〟というように天正年間（一五七三〜九二）から安永年間（一七七二〜八〇）まで、約二〇〇年と広い。また板絵を描いた絵師を見ても、額の作られた年代により、中央画壇の画匠の狩野派の物と、地方の筑前の絵師の製作によるものとがある。これは扁額を奉納する時の状況により、発注先の画匠を変えたのであろう。それぞれを見ていくと、同じ様に構成され形づくられた一枚〱の絵に、作風など種々の変化を見ることも出来る。美術的な力量差を感じるのはさることながら、美術史上や文化の推移を研究する上で、非常に興味深いだけでなく重要な文化財である。

ただ天正から安永までの五組の額の絵そのものの構図は、ワンパターンで統一されている。年代差による多少の変化は認められるが、手本となる絵柄の構図の様式は、鎌倉時代に作られた三十六歌仙の絵巻物「佐竹本」を基礎にしているようである。それは、当時の画壇の総師狩野派が描く、三十六歌仙絵の基本線であったからであろう。

ここで大社が所蔵している板絵を描いた絵師は、その主流を歩んでいたことがうかがえる。

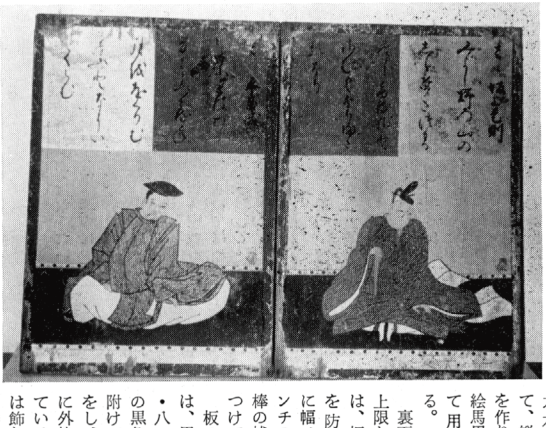
今回からは、五組の「歌仙絵馬」を年代順に追いながら、その足跡をたどっていくこととする。

まず、当社所蔵絵馬の中でも一番古い、天正年間の物から説明していく。これは杉板に絵を描いたものである。表面全面にはまず顔料を塗り固めて下地とし、その上に和歌と肖像画とがかかれ、歌仙扁額を形作っている。

板面は縦五二・四センチ、横幅三六・四センチ、厚さ一・〇センチを計り、三十六枚（但し一枚欠けている）がすべて同一規格の大きさの板である。柾目が細かくよく通った杉の大木を使って、縦割り板を作り出し、絵馬用板として用いている。

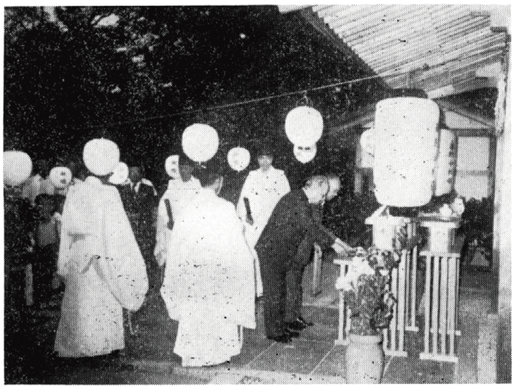
裏面の縁の上限と下限には、板のそりを防ぐために幅一・五センチの細い杉棒の桟を打ちつけている。

板の表面には、周囲に一・八センチ幅の黒色を塗り附けて縁取りをし、額縁状に外枠を描いている。これは飾り絵の外に枠を別に張りつける額縁の一種でもあり、また額縁を張りつけるようになった、一時代前の形式でもあると思われる。



前面は和歌と肖像画で、大きく二対三の割り合いに区分し、上段に歌を下段に画像を配置している。全体の三割近くに歌人の画像が描かれ、絵馬の安定感を強くだしている。また歌の部分は、左右に二分して中心より右側に前句の五七五、左側に七七の後句を書き、背景の色調を異に配した色紙形としている。

宗像護国神社
戦没者慰霊祭斎行



真夏の暑い太陽がぎらぎらと照り輝く、八月十五日がまた巡って来た。

大東亜戦争終戦より今年で四十二年、平和な今日の我国では、全国高等学校野球大会に国民が一喜一憂するこの日であるが、しかし決して忘れることが出来ない、いや忘れてはならない日である。

この日、東京の日本武道館では、天皇陛下の御臨席を仰ぎ、政府主催による第二十五回「全国戦没者追悼式」が執り行われ、又全国各地でも戦没者の追悼式が行われたが、当宗像地区に於ても、宗像郡市出身の約二千四百柱の英霊を奉斎する宗像護国神社にて、例年の如く午後七時より、戦没者慰霊祭が厳粛に斎行された。

祭典に先立ち、田島区の児童達によって、参道に設けられた灯明と提燈に、日没を合図に一斉に灯がともされると、境内は英霊をお迎えする灯りで耀き渡った。

定刻、当大社宗像祢宜以下四名の神職奉仕の下、祭典を開始、御神前には海川山野の味物の外に、煙草、ガメの葉饅頭などの嗜好品もお供えし、英霊の尊い犠牲により、今日の平和な我国があることを私達は忘れることなく、いつ迄もこの平和を護るべく努力を誓うと共に、行く先長くお護り下さるよう祈念して祝詞を奏上した。

続いて、宗像郡遺族会縄田佐蔵会長、宗像市遺族会出光太蔵会長を始め、伊豆・小山両県議会議員、和田玄海町々長等、参列者により敬虔な祈りが捧げられ、御国の為に尊い命を捧げられた英霊の御魂をお慰め申し上げて、祭典は滞り無く終了した。

祭典終了後、境内に於て田島区育生会による子供花火大会と、田島区の人々による供養盆踊り大会が、夏の夜の更けるまで続けられた。

戦後四十二年ともなると、今日の平和が当然のことと感じ、ともすれば八月十五日の、そしてこの日に行われる戦没者追悼式の意義を忘れがちになると共に、靖国神社公式参拝に対する内政干渉ともいうべき外圧、国内反対派の活動など、我国本来の姿を見失う危険性が多分に窺われる。このような日本であればこそ、この尊い犠牲により今日の日本があることを、深く心に刻む為にも、英霊をお慰めするこの心を、子々孫々まで伝えて行くことこそ、我々に課せられた使命ではなかろうか。

一歳になったヤズッ子
中津宮照海殿勉強会

大島の小学校生を対象に〃遊びを通しての勉強会〃通称ヤズッ子会がはや一年を経過した。この会は氏神中津宮の神官より主旨説明があり私達も賛同指導にあたっています。幼い時代の遊びを思い出し、普段使う機会の少ないナイフ・のこ切り等を使い、竹馬、竹トンボ、連ダコ、桜の木の名札づくり、カブト・クワガタ虫の競技、昔なつかしい童謡（われは海の子）、一泊しての研修等々行ってきました。子供達は学校とは違った面白さ、楽しさを味わっていたようです。創作活動の中で上級生は下級生への思いやりも忘れなかったようです。中には優越感に浸る子もいました。遊びの中から生まれる上下の関係は人間形成の上で大いに役立っていると感じました。又、運営に当って島の方々に多くの協力を得ています。つるし柿の柿の提供、竹細工の指導、一泊研修の裏方等、本当にありがとうございます。心より感謝いたします。

現代社会で忘れかけているものとして「人と人とのつながり」「人を思いやる心」というものが挙げられますが、ヤズッ子会の子供達はそれを体験によって学び将来も忘れることはないと信じます。

・最後にヤズッ子が立派なブリになる日を夢みて一年間の報告とお礼に変えさせていただきます。

大島村教育委員会
河野　幸一　記

（写真は一泊研修の一コマ浜で遊ぶヤズッ子）

筑前大島の夏
中津宮七夕祭り
＝老いも若きもゆかた姿で七夕踊り＝

中津宮恒例の七夕祭が去る八月七日、盛大に斎行され夏の一夜を楽しんだ。

中津宮境内一の石鳥居をくぐると左側に美しい小川があり年中清水を海に注いでいる。この川を「天の川」と呼び、渡した橋を「かささぎ橋」と言う。橋を渡った小高き処に織女社が祀られ、対した丘に牽牛社が祀られ、天の川を背に祭壇が設けられ七夕祭がおこなわれる。

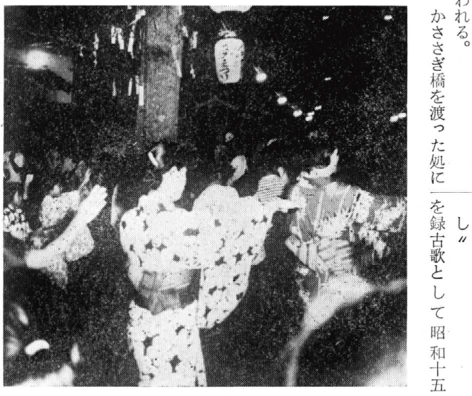
かささぎ橋を渡った処に野北右の歌碑があり、

いかなれば
とだえそめけむ天の川
あふせにわたす
かささぎのはし

と詠まれている。この歌は古今和歌集の読人不知の詠として、

〃秋風の吹きにしより久方
天の川原に立たぬ日はなし〃

を録古歌として昭和十五年、故武田祐吉先生（文学博士）が中津宮参拝の折詠まれたものである。



夜八時、古式に則り芝垣に囲まれた棚機が設けられ、五色の短冊が竹笹に飾られ揺らぐ中、祭典が始まり、中村村長始め老若男女の敬虔な祈りが捧げられた。祭後、「七夕踊」「大島慕情」等が二重、三重の輪になり盛大に踊られた。

続いて子供等の楽しみ「ヨーヨー釣り、稚魚スクイ」が始まり、「ヤッター、アレー」の喚声の中、またたく間に品切れの盛況であった。

七夕踊（夕波千鳥）
※一番のみ

一、島の嬢もんさんの
七夕踊り
通う磯道　中津宮
手振り　身振りの
程のよさ
海もなぎるじゃないかいな
さーさ　踊ってお見せ
ほんに大島良かとこ
ばいばい

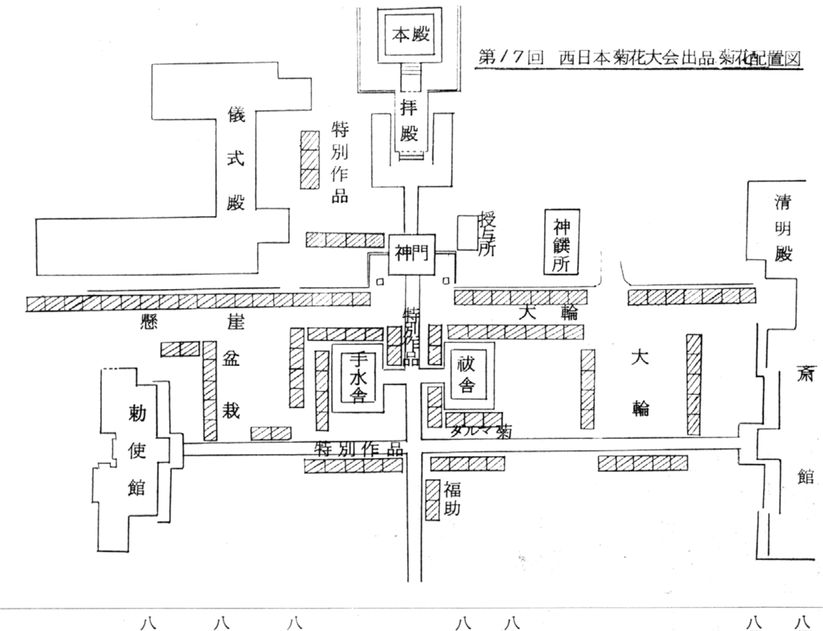
作詞　武田祐吉
振付　多　忠朝

七夕踊りに大変御協力下さいました中村幸子殿、村婦人部、漁協婦人部、敬神婦人部、青年団、小中学校外村の方々には誌上より厚く御礼申し上げますと共に、今後共情緒ある七夕踊の継承に御参加下さいます様御願い申し上げます。

又、七夕祭に御協賛頂きました神湊みなと荘・原聖観殿、田島・高向辰馬殿、大島漁業協同組合、宗像農協大島支所、大島郵便局、春海堂各位に誌上より厚く御礼申し上げます。

中津宮社務所

第十七回　西日本菊花大会々場案内



社務日誌抄

八月一日　月次祭
八月二日　一ノ宮市真清田神社宮司生田和夫氏・宗像神恩会代表佐分けい子氏外二十二名参拝
福岡出光スタンド福友会・出光興産㈱福岡支店多田氏外五十名境内清掃奉仕
宗像護国神社慰霊祭打ち合せ会議
八月三日　職員並びに職員家族懇親会
鹿島建設㈱九州支店宗氏・立石氏・㈱弘江組社長中野弘愛氏来社
八月四日　夏季交通安全キャンペーン於玄海町
北海道新聞社記者二名来社神宝館取材
八月五日　太宰府天満宮との懇親野球大会
八月六日　出光興産㈱福岡支店松本氏外二名来社
八月七日　中津宮七夕祭
㈱黒瀬組福岡支店吉田雅尋氏外一名来社
明和電設吉田孚氏・和光ハウジング吉田公一氏・魚屋旅館吉武謹一氏来社
下関美術館長財津氏・福岡教育大生五名博物館学芸員実習にて来社
八月十日　郷土太宰府を守る会五十名参拝
八月十一日　交通安全キャンペーン於九州自動車道古賀サービスエリア
宗像地区郷土芸能振興協議会総会
NHK放送出版来社神宝撮影（十三日迄）
八月十五日　月次祭
宗像護国神社戦没者慰霊祭・千灯明
八月十九日　出光興産㈱愛知製油所長杉村直珍参拝
八月二十五日　小野田市別府八幡宮々司渡辺克忠氏外敬神婦人部七十五名参拝
日揮メンテナンス㈱徳山事業所長塩沢進氏外二名参拝
八月二十七日　國學院大學神道科四十八期同窓生十名参拝
佐賀県神社庁藤津地区支部五十名参拝
八幡西区中島校区社会福祉協議会三十名参拝
出光興産㈱福岡支店小方正義氏外二名来社
八月二十八日　出光興産㈱新燃料部石炭物流課長高橋信一氏・福岡支店石炭課長大川佳伸氏参拝
賀茂御祖神社権祢宜嵯峨井氏参拝
八月二十九日　秋季大祭海洋神事打ち合せ会
八幡西区浅川中学校生徒三百六十名外教諭・PTA役員参拝

宗像大社歌会 俳句作品集（二九四）

鐘崎　岩瀬　辰夫
鉢に植へ小玉トマト観賞す

津屋崎　井浦　良介
夜の雷光みどりの地表洗い出す

福岡中央　力丸　玄風
海鳴りのほしいまゝなる土用浪（なみ）

田熊　安部　ゆき
荒れ果てし空家さびしく法師蟬

田熊　力丸　一郎
百日紅百日白の上に揺れ

福間　広渡　一寿軒
棚経の僧もそそくさ予報聞き

津屋崎　西住　喜三郎
八月や火照る蹠を出し睡る

藤沢　井上　玄洋
蜩（ひぐらし）の声をあつめて大銀杏

池田　小田　しめの
球児等の汗が涙が袖にしむ

日の里　花田　いつえ
硯洗ふ水に墨絵の雲湧きぬ

（続）浜の寄物　21

対馬の寄物(2)

いしいただし

今号も荒木卓爾氏からいただいた便りの続きである。

「阿連から小茂田は普通、西海岸と呼ばれるところです。漂着物はこの西海岸が絶対に多い筈です。

冬に漂着するイカの名前を「ソデイカ」と言うのは貴誌に依り始めて知りました。最初に農家の庭に干してあるのを見た時、座蒲団と間違えて、そばに行ってよくよく眺めたらイカでした。

私は漂着イカ（ソデイカ）の幸運には恵まれませんでしたが、食べるのは、たくさんたべました。友達や義母は「うんうん」言いながら担いで来たものでした。朝たまたま、出勤時に行き当ると、捨てるのは惜しいし、汗びっしょりになって持ち運んだそうです。

朝まだ誰も通ってない浜を歩くと、夜のうちに押し上げられた漂着物が、満潮線の位置に並んで打ち上げられており、その中に大抵魚が混じっていました。

冬の海や浜辺で、魚を拾うのは、村の人にとっては、当り前の事で、海岸では、また何十米も先に魚が浮いているのを見つけると、暇な人は岸に寄って来るのを、じっと待っていました。この様な時の魚は、大抵、ものすごく大きく、打ち寄せられる波で、必らず何百回かの繰り返しのうちに、岸へ漂着物を運んでくれます。

●注、前号にも記したこのような魚の漂着は、対馬で寄魚（よりうお）や立魚（たちうお）と呼ばれている。寄魚は海岸に流れ寄った大形の死魚で、寄鯨はその代表。一方、立魚とは湾内や入江にたちこんでくる活魚の群れをいい、アジやサバ、イカなど、通常はイルカ、マグロなど大形魚を指すと」阿比留博嘉氏の「対馬のイルカ漁」に記されている。氏は『寄魚や立魚は、小さな海辺の村に或る日、突然やってくる、目のくらむような宝物であった』と述べられている。

また椰子も漂着しますが、割って内果皮を加工して、米すくいや水すくいに使うこともありました。また椰子の生（なま）を拾って、中の汁を呑んで見た人もいます。

●注、椰子の漂着については対馬在住の郷土史家、永留久恵氏の著書にも多く記されているし、対馬暖流が直接あたる位置にあり、漂着は多い。椰子だけではなくモダマの漂着もある。藻玉とか榼藤子とも記すが、まめ科で、四～五センチもある堅い円や楕円形を呈している種子。斎藤弘征氏の「対馬の植物相」には、江戸期対馬藩の記録である宗家文庫の「毎日記」の一節を紹介している。「豊崎郡奉役比田勝長兵衛、豊村下知人大浦格兵衛等にもだま植付の儀仰せ付ける。豊村島のこうべの浪際にももだまの木四本あり。貞享二年（一六八五）六月八日、また同年八月十五日に、豊村下知人大浦格兵衛、もだまの種二本萌出すにつき葉一枚を差登す。

以上二つの注は、えとのす30号、一九八六年七月刊によった。

難破船は数かぎりなくあります。多くは海岸の砂に埋れたまま放置されますが、時には思いがけない贈物が載っている場合もあります。漂着物は決して一人占めするのではなく、誰彼に告げて皆で分けます。災難の配分か、若しくは信仰心でしょう。

死体を見つけると豊漁につながると言って女の人でも引き揚げてしかるべき所へ注進します。死体を見たら逃げてはいけないそうで、必ず浜に引き揚げ「待っていなさいよ、いま皆呼んで来るからね」これが不分律、これをやらないと不幸が来るそうです。

（写真は小茂田海岸）

まつりと生活（八）

秋祭り

春にまいた稲種もいよいよ実りに入り、収穫の時期が近づいてきましたので、今回は秋祭りの中の、新嘗祭と神嘗祭をとりあげてみました。

新嘗祭というのは、その年に最初に実った稲を神さまに感謝を込めて、お供えするお祭りです。全国の神社では十一月二十三日の勤労感謝の日に行われます。又皇居では天皇陛下が天照大神をはじめ、神々にささげられ、御自らもおめしあがりになります。本来新嘗祭は皇室におけるお祭りで、天皇陛下が新穀をめしあがることによって、神さまから新しい生命力をいただかれるのです。現在では一般の神社においても行われるようになり、例祭と同様に重要なお祭りとなっています。

次に神嘗祭は、神宮の年間のお祭りの中でも、最も重要なお祭りで、十月十五日から十七日まで三日間に亘って両宮で行われます。このお祭りは、天照大神に新穀をささげるお祭りで、神宮だけに行われます。その時は、全国各地からその年にとれた稲（初穂）が奉納されます。

このようにこれら二つのお祭りは収穫にあたって、新穀を神にささげ、神と共に喜び、感謝するお祭りで日本人の自然観や生活観から生れたお祭りと言えます。

この二つのお祭りは、春の最初に行われる祈年祭（としごいのまつり）に始まり、やがて、稲作農耕の季節的な段階に応じて、いろいろなお祭りが行われ、収穫の祭りとなり、これらは春から秋へと密接な関係をもった祭りなのです。

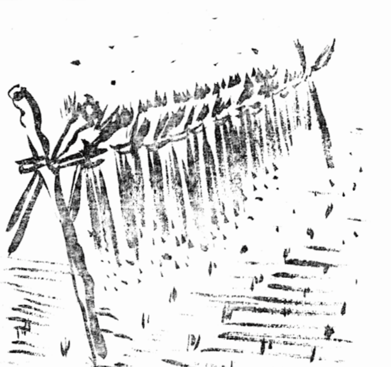
古来、稲作を中心として生きた祖先たちにとって、農作物の豊作か凶作かは、生活に直結する重要なことでった。秋の豊作を心から祈る人々にとっては、稲作を始める春に、豊作を祈願するための祈年祭は、実に真剣だったにちがいないと思います。

だから、春の儀礼の中には、実際の農作業の手順を、神の前に於て演ずるため、耕作・播種・田植・収穫までの色々な所作をもって田の神に披露する祭、例えば、お田植祭や抜穂祭などといった神事が各地の神社で見うけられ、今日でも、このように日本民族の伝統行事が受け継がれています。

古代の人たちは、農耕生活を基盤とした社会にあったから、当然といえば当然でしょう。

ところで、今日の日本は高度工業社会であると言えます。同時に農業も近代化し、かつてのように、手で苗を植え、鍬や鋤にたよって耕作することも少なくなりました。一方では農地は工業用地や市街地と狭められ、残された農地は減反政策によって荒地とかしている状態です。古来から「豊葦原の瑞穂国」という言葉で示された、我国本来の特質も、現在ではかなりの変貌を遂げています。

しかし、神社では今日でも、新嘗祭を始め、日本的風土を背景とした伝統行事がたくさん残っています。我々の祖先が長い歴史を通して伝え培ってきた日本民族の伝統を子々孫々まで伝えたいものです。



宗像むかし話（21）

宗像河童

その昔、御前の浜（現在の神宝館前駐車場の所）に長太郎と云ふ年老いた河童が住んでいました。なんでも前身は藁人形だそうで大宮司氏国の頃、片脇城築城の際に人手が不足したので藁人形を作って手伝いをさせ、工事が完ってから人形を釣川に捨て、そこらにあるものを食って暮らせと言われて以来河童に仲間入りをしたのだそうです。何分年が年だけに世故にはたけているし、氏素性もしっかりしていますので領内一円の河童の元締めを言いつかっていました。その長太郎河童がこれはまた浮かぬ顔で甲羅を干しています。実は今日大宮司の館に呼びつけられて最近の監督不行届で頭の皿の水がからからになるほど油をしぼられたせいです。

原因は江口河童が近所の子供をからかって困る。手光河童が人の尻毛を抜くので領民は甚だ迷惑をしていると言った類のことです。

「昔は良かったなあ、最近は食いものも減って、河童も思想が悪くなったよ、まあいろいろあらあな」さりとて放っとくわけにもいきませんので不良河童退治にでかけました。流れに乗って川を下りますと、江口の往還のあたりで土煙が上っています。よく見ると江口河童が子供を相手に相撲をとっています。強そうな子供がかかって行きますとすぐに分身の術を使って何匹も同じ河童になります。子供が困って泣き出せば手を叩いて喜んでいます「ちえ、ちょろい手を使いやがって」とつぶやいた長太郎河童は子供の一人を呼んで策を授けました。「いいか先ず畠からキュウリを取って来い奴はこれが好物だからな。それから奴が術をかけたら目の前にそれを投げ出してやれ、どうせいやしいやつだから拾い食いするにちがいない。そこをお前が後から蹴とばせ、面白いことになるぞ」言われた子供は、一目散に近所の畠へ駆け込みキュウリを二三本懐に入れて帰って来ました。「やい今度は俺が相手だ」と江口河童に組みつきます。

心得たりと江口河童が白煙を上げて例の分身の術を始めます。その目の前に大好物のキュウリを投げだしたからたまりません。白煙の中からよだれを垂した江口河童がキュウリに飛びついたとたんに子供が後から蹴上げました。よろよろと前につんのめった江口河童の頭の皿からたらたらと水がこぼれました。これが河童の泣き所です。皿の水が無くなれば全身土気色になり五体は萎えてしまいます。

江口河童のあわれな最期を見とどけた長太郎河童は再び水に飛びこみ川を上りながら考えました。今度の手光河童はなにしろ素早い奴だから俺の手にはかかりそうもない。ここは一つ頭を下げて人間の力を借るに限ると思って知り合いの手光の庄屋吉田某の顔を想い浮べました。

この風変りな頼みを聞いた吉田某は頭をひねって作戦を練りました。敵を欺くには先ず味方からと、その日の夕刻少量のヒマシュを飲みました。

「吉田の旦那が腹痛で雪隠通いだそうだ」これを聞いて喜んだのは手光河童です。なるほど雪隠の中なら気を許しているだろうし一番無防備のところです。これを下から頂けばと、少し臭くありましたが夕刻から忍び込んで今や遅しと待ち構えていますと、どたどたと吉田の旦那がトイレに駆け込むや、御承知のようなスタイルになりました。〆たと黒い手をさしのべたところ、そこは居合いの達人です。むんずとその手をつかんでねじ切ってしまいました。

あわてて逃げ出した手光河童は日の光に照らされた片手だけの己が姿を見て前非を悔いて後日吉田某に詫びを入れ、河童流の接骨術と交換に自分の手を戻してもらいました。